富永家文書目録解題

富永家は、新潟県中頸城郡三和村（現上越市三和区）神田で、水濠を回らせた約 6,000 ㎡の豪壮な屋敷構えの中にある。隣接して同家の開基によるといわれる法徳廃寺跡（1965 年頃廃寺）、清雲廃寺跡（廃寺時期不明）がある。この地域では富永家を「おい（老い）の家」と呼称している。

富永家の「当家累世史」によると、富永左京清綱を祖とし、2 代源左衛門が慶長 19 年（1614）没、3 代八左衛門は寛文元年（1661）没、以下、兵右衛門・小傳次・八左衛門・新五左衛門・三郎左衛門などと続き、7 代目と見られる初世三郎左衛門は、享保 12 年（1727）没である。富永家は近世初期から神田村庄屋を務めたものと思われる。伝存する史料は、初世三郎左衛門のころからのものが大部分で、このころから幕末まで、ほぼ世襲的に神田村庄屋を務めていたことは史料から明らかである。継右衛門・仙智などと名乗るものが世代を継ぎ、二世継右衛門で幕末を迎える。なお神田村は高田藩松平光永改易後から幕末まで基本的には幕府領で、富永家は川浦役所や脇野町役所支配の頸城郡村々の村役人の惣代なども務めている。

この間、五兵衛・護右衛門などが隠居や分家などの形で分立している。これからさらに分家したものなども含め、神田地区には一族とみられる富永氏が集中的に現住している。なお「当家累世史」によると、寛文 3 年（1663）没の初世小傳次の子新五左衛門の次男五郎八と四世三郎左衛門の子護右衛門が奥州小名浜（いわき市）御代官陰山外記の手代を務め、五郎八は任地で死去、護右衛門は安永年間に帰郷し、その後当地で分家したと記されている。

富永家の一族には、後に代々医師・文人として著名な富永仙八家（居住地から「原山富永家」と呼ばれる）と、近くに幕藩有林の「御林」があったことから「林富永家」と呼ばれる二家の地主があり、いわば「豪農の館」ともいうべき豪壮な屋敷や邸宅が現存している。この「原山富永家」は文化 3 年（1806）、前記の環濠屋敷の内にあった富永一族の「兵右衛門家」から分立したといわれ、「林富永家」は奥州で代官の手代を務めた護右衛門がその祖であるといわれる。

当富永家に仙智と名乗る人物がいるが、文政 12 年（1829）、前記「原山富永家」の仙八が「今はの時（死に臨んで）」に記して、その仙智に与えた「産婦免許状」が現存していて、富永仙智も医家であったことがわかり、薬種頒布に関する史料も多く伝存している。

日蓮宗法徳寺（廃寺）の記録によると、「文録二癸巳年大守上杉景勝公、奥州会津へ所替有所、堀久太郎殿国主として国中無本寺の寺院多分被潰之ヲ、時、将監子左京進、上杉家浪人、当所旧領たるを以則居住ス」とある。「当家累世史」に富永家の祖とされる「富永左京」はこれと思われる。

ところで伝存史料の中に、「天文九正月八日　一楽院殿日富尊儀　富永殿御父儀」「永禄三庚申年三月五日　清雲殿日永尊儀　富永殿御母儀」「天正十六戊子七月十二日　常仙院殿日圓大居士　富永山城守」と連記した法名書がある（51-1540-1）。

当富永家では、この法名書については何も伝わっておらず不明だが、「原山富永家」の過去帳では「一楽院殿日富大居士」は富永備中守源政辰で「天文九庚子年正月北条氏康破管領上杉憲政　此戦死」とあり、「常仙院殿日圓大居士」は富永山城守源政家で「創立日蓮宗清雲寺　於伊豆国土肥村　右末寺妙蔵寺、栄源寺、蓮華寺、竜泉寺、妙田寺」とある。

また、同過去帳には「清真院殿道印日秀居士」ともあり、これは富永左京源政家で「慶長三戊戌年三月　上杉景勝渉干会津（あいづにわたる）、此時政家弟家政辞官、剃髪号道印、住居神田村」と記されている。

一方、永岡治氏によると、戦国時代、伊豆国土肥谷城主に水軍を率いる富永三郎左衛門政直があり、子の政辰、政辰の子政家と 3 代にわたり北条氏に仕え、江戸城主を兼務する重臣

であった。3 代政家は、江戸城と栗橋城を預かり、西土肥 7 ヶ村のほか南伊豆の妻良・加納両村、武蔵牛島村、上総勝村などに 2 万石を与えられた。政家は、永禄 7（1564）年正月国府台の合戦といわれる里見軍との戦いで討ち死にした父政辰の菩提を弔うために父母の法号からとって、領地の西土肥のうちに、日蓮宗「一楽山清雲寺」を始め、多くの社寺を創建した。これらの社寺は静岡県土肥町（現伊豆市）に現存する。政家は天正 17（1589）年、秀吉の北条攻めで韮山城に籠城して戦ったが、翌年北条氏の滅亡により、一族は流浪の身となって奥州に落ちたという（静岡県土肥町教育委員会　郷土誌叢書第八集「土肥の人物誌」）。

これは「原山富永家」の過去帳とも符合し、前記の富永家に伝存する法名書は、この政辰とその妻、及びその子政家のものと断定してよいだろう。「原山富永家」過去帳の富永左京源家政はこの政家の弟で、富永家の「当家累世史」にいう富永家の祖富永左京清綱、法徳寺の記録にある富永左京進は同一人物で、その経緯は明らかでないが、上杉氏に臣従し、上杉氏の会津移封の時、三和村神田に土着したものと考えられる。なお、前記の法徳寺の記録では、左京進の弟に富永備中守があり、弟の備中守は景勝にしたがって会津へ赴いたと記されている。

「天正三年上杉家軍役帳」（『新潟県史資料編 3』）などの上杉家の家臣団名簿の中に富永氏の名は見えないが、慶長 2（1597）年成立といわれる「越後国頸城郡絵図」（米沢市「上杉家文書」）では、五十公郷「大光寺村」・「和田村」の知行主に「富永与次郎」の名が見え、「大つき村」・「かミ屋村」に御料所と相給で「留長与次郎」の名が見える。この両与次郎は同一人物とみられる。なお、高津郷の「日朝寺村」は愛岩（宕）分と「富長分」とされている。同図では「かん田村」は「至徳寺分・此外十四方分」とされている。
『上杉家御年譜二十三』（昭和 61 年米沢温故会）には「富永備中長綱」家と、「富永治部」家が見え、幕末まで続いている。

中世以前のこれらの事項がどのようにつながっているか、整然と理解することは困難であるが、今回収録した近世資料を中心とした富永家文書の背景として把握しておくことは重要であろう。